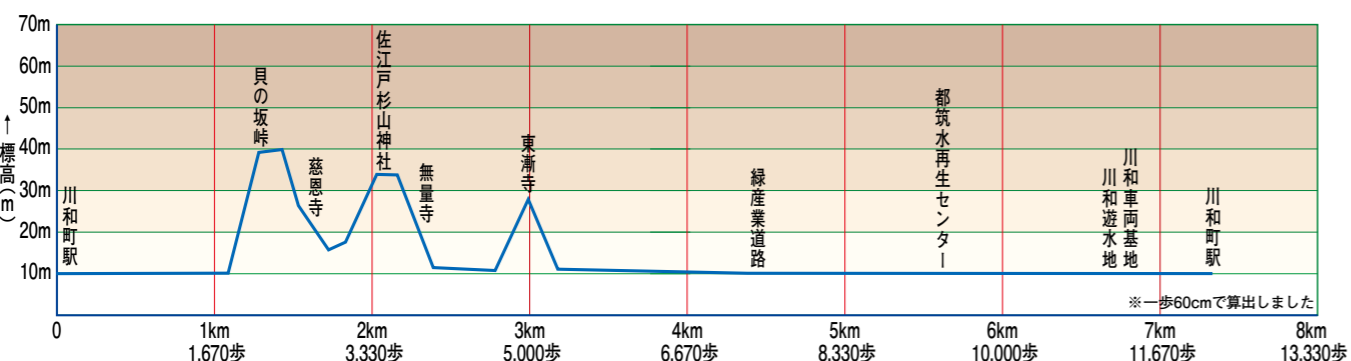


# 川和・佐江戸の歴史を訪ね、鶴見川を歩くコース



池辺農業専用地区

**1 中山恒三郎家** (横浜市認定歴史的建造物)  
江戸時代より酒類問屋などを家業としてきた豪商。当主は「恒三郎」を襲名、地域のリーダーの一人として活躍した。横浜市認定歴史的建造物の店蔵と書院(写真)などが現存する。近代の菊園「松林園」は、皇族も訪れ、「川和の菊」として名所であった。



**2 貝の坂の旧道**  
中原街道と大山街道に挟まれた日野往還の川和に都筑郡役所が置かれ、明治29年(1896)に貝の坂が改修される前までは、このあたりは山超えの道であった。佐江戸側には峠の茶屋があったといわれている。



**3 土府根薬師堂**  
天正18年(1590)小田原落城の際、支城の小机城家老が薬師像を背負って川和に逃れ、千代橋際に奉安した。その後、鶴見川の洪水や貝の坂の上麻生線の道路拡張により、この地に奉安された。



**4 佐江戸杉山神社**  
祭神は五十猛命、例祭は9月27日。境内には佐江戸町内会館と神楽殿がある。その他日露戦争従軍碑、御獄三柱大神の碑がある。本殿は関東大地震で倒壊したが再建された。周囲の古木に歴史を感じる。



**5 無量寺**  
高野山真言宗で、本尊は阿彌陀如来。開創年は鎌倉時代後期(1299頃)の歴史のある寺で、都筑の南部で最も古いといわれている。墓地には佐江戸城を築いたといわれる猿渡内匠助の墓がある。寺の参道は中原街道に面している。



**6 佐江戸の寺子屋**  
幕末から明治にかけて佐江戸では、小川金蔵により寺子屋が開かれ、農民の子どもたちが、読み書きそろばんを学んでいた。小川家には当時の文机や教科書が残っている。39ページ参照。【非公開】



**7 東漸寺**  
高野山真言宗、本尊は不動明王。天平年間(729~749)に行基が開山。一旦は廃寺になったが、永享12年(1440)に再興。本堂の左手に「三人寄れば文殊の知恵」といわれる文殊菩薩があり、知恵の仏様として知られている。墓地に佐江戸領主竹尾佐五左衛門元孝の墓がある。



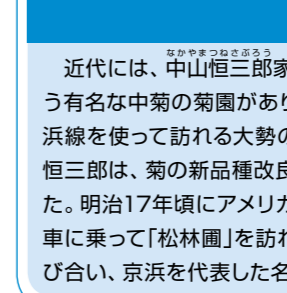
**8 江川せせらぎ緑道**  
都筑水再生センター(污水处理場)の高度処理水が、街に潤いを与えながら流れる江川せせらぎには、鮎や鯉が泳ぎ、岸辺には四季折々の花が咲く。



**9 川和車両基地・遊水地**  
基地には市営地下鉄グリーンラインの車両整備、設備保守、車庫としての役目があり、17編成68車両を収容できる。基地の地下には、鶴見川の流域を水害から守るための遊水地(神奈川県管理)が設けられており、これは全国初の取組みである。



**川和の菊**  
近代には、中山恒三郎家の「松林園」と中山良材家の「虎溪園」という有名な菊の菊園があり、秋になると東京や横浜から人力車や横浜線を使って訪れる大勢の菊見客で賑わった。「松林園」の3代中山恒三郎は、菊の新品種改良及び栽培普及に努めた人として著名だった。明治17年頃にアメリカ人の紀行作家エリザ・R・シンドモアは人力車に乗って「松林園」を訪れている。地域の人たちは「川和の菊」と呼び合い、京浜を代表した名所であった。



## 川和の歴史

明治11年(1878)12月川井村(旭区)に置かれた都筑郡役所は、翌年7月に都筑郡(現在の保土ケ谷区の一部、旭区、港北区の一部、緑区、青葉区、都筑区、川崎市麻生区)の中央に位置する川和村に移転した。郡役所が置かれたことから名実共に都筑郡の郡政・商業の中心地として栄えた。昭和14年(1939)4月には横浜市へ編入され、同年末まで池辺町に港北区役所川和出張所が置かれた。昭和15年1月から同区内に置かれた7出張所は集約され川和出張所(川和町の旧郡役所)となり、昭和39年(1964)4月に支所に昇格した。昭和47年(1972)4月に川和町から寺山町に緑区役所が移転すると、警察署、郵便局、土木事務所などの行政機関が次々と中山駅周辺に移った。その後、川和町は市北部における行政の中心地から商業、工業、新興住宅などが進出し姿を変え、今日では市営地下鉄川和町駅を中心に新しい川和町へと発展を続けている。



昭和初期の川和町 中央の建物が警察署、右の手前から2つ目の建物が郡役所